

小池辰雄記念図書室だより

2014.6.1(日)NO.19 千葉市若葉区都賀3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

1. 全国の読む会 読書会に参加して

都賀 鳥居比佐子

「ザアカイ」

読書会は4月に続いて2回目の参加です。イエスを一目見ようと人々が誘いあい、ざわめきながら群れ集まっている、その輪からはじき出されて、仕方なく桑の木によじ登った……。ザアカイの必死の姿が目には浮かぶようです。

4月に水谷先生が語られた、「聖書を読むとは神のお考えに触れること。祈りは神との対話である」という言葉に、頑ななかんがえがふっと緩む心地がしました。

聖書も知らず、祈りもせずに還暦を過ぎました。昔から運動は苦手ですが、ここ数年東北の山々を巡って、登らざるを得ない欲求に囚われています。

若い時代には考えも及ばなかった高みに立つと、それは自分の筋力で登ったのではない、自然と自分が一体となり、何か大きな力によって引き上げられたことを感じます。

その何かへの恐れと憧れが私を動かしています。桑の木にぶら下がったザアカイに自分を重ねて、人は失われても、なお探し出して下さる何かがおられることを信じたいと思います。

ありがとうございました。

2. 全国の読む会 読書会に参加して

都賀 鶴ヶ谷守行

機会があって5月24日(土)に都賀で開催された小池辰雄を読む会に友人と参加させて頂きました。当日の講義箇所は「無者キリスト」の第三相「桑の木によじのぼる」でした。ザアカイという名の取税頭がイエスを一目見たさの余り、桑の木によじ登るといふ意表をついた行動に出たところ、それがイエスの目に留まる結果に繋がったというルカ伝の内容から、信仰には「全身的、全存在的な求め」が必要であること、「人生には、決定的な瞬間があり、その瞬間を捉えるか捉えないかが、その人の生涯に大きな開きを来すものである」ことを教えて頂きました。

水谷先生のお話の中にあつた「部屋に空きがあつたら連絡するから、そうしたら来なさい」

と伝えた青年が、翌朝唐突に戸口に立っていたとのエピソードも、思い巡らすばかりで行動に移れない私に対する教訓であり、「ひたすら絶対なるものに体当たりする」ことが出来るか、自分に試されていると痛感させられました(でも結局、分かっただけではダメですね)。



小池辰雄を読む会

●余市

2014年6月7日(日)13:30~15:00

2014年7月13日(日)13:30~15:00

余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:0135-23-9222(木下)

●札幌

2014年6月7日(土)14:00~16:00

(札幌市南区川沿10条3-10-5 札幌祈りの家)

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:011-571-2348(三ツ木)

●帯広 ●北見

*しばらくお休みします。

●都賀

2014年6月28日(土)10:00~12:00

2014年7月19日(土)10:00~12:00

千葉市若葉区都賀3-24-8 都賀プラザ5階

*会費:1000円

*連絡先:043-235-3815(石丸)

*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

●丹波

*6月7日はお休みします。

*予習不要・初心者歓迎

図書室便りは偶数月発行です。

本図書室は献金で運営されています。



小池一家 1958年

小池信雄

(小池牧子と交互に執筆します)

敗戦か終戦か

前々回、ヨハンナ・スピーリー『神はわが友』の訳者まえがきに記した終戦直後の辰雄の心境に「不安」を感じたと書いたのは、あの文章の中に私の母への批判をみた気がしたからだった。

日本が降伏した日、五歳の私は東北の一ノ関狐禅寺村の畑道で、「戦争が終わったぞー」と遠くで叫ぶ声を聞いた。晴れ渡った空に一機、小さく飛行機が飛んでいたの、戦争が終わったのにあの飛行機は何をしているのだろうと思っただけで、まだ敗戦という現実を知るにはあまりに幼すぎた。村の小学校に通っていた二人の姉は、「米兵がきたら田んぼの中に逃げなさい」と校長先生が言ったと話した。秋になって、田んぼが黄金色になったころ母が、「そろそろお父さんが来るころだから、表の道に出てお迎えしなさい」という。私は、溪流沿いに奥へ入った水車小屋から荷馬車の通る道まで出て、はるか一ノ関に続くあぜ道をリックを背負ってやってくる父をむかえた。

この秋、父・小池辰雄は狐禅寺村の水車小屋でヨハンナ・スピーリー『神はわが友』を訳し、母・順子と「家庭における信仰」について語り合い、前述のまえがきになったのだと思う。

辰雄も順子も共に無教会派藤井武の集会のメンバーだから、この時点でその信仰に大きな差があったとは思えないが、父を疎開地で迎えた母や私たち子どもと決定的に違う点があるとしたらそれは戦争の受け止め方であると、今なら分かる。

国が戦争に負けるということは、ワールドカップで敗退するのとはわけが違う。今でも二〇年前のサッカー試合「ドーハの悲劇」を悔しく語るくらいだから、二六〇万～三〇〇万人の日本人が死んだ太平洋戦争敗退の衝撃は、その何万倍、いや想像を絶するものがある。ましてや、自ら戦争の主役である軍人養成学校（幼年学校、士官学校、陸軍大学）の教官であった小池辰雄が、一面の焼け野原となった東京を見ながら考え続けたこと（「天より火くだりて彼らを焼き尽くし、彼らを惑わしたる悪魔は、火と硫黄との池に投げ入れられたり」、おそらくはヨハネ黙示録と思うが）を私はただ想像するだけで、その何十分の一の実感も、共有できない。同じように、現在日本に生きている七五歳以下の人びとのほとんどが分からない。

太平洋戦争で死んだ日本人二六〇万～三〇〇万人、その中で職業軍人になった辰雄の教え子たちのほとんどは「玉砕」していただろう。さらに日本人に殺された者は、中国人だけでも一〇〇〇万

人～二〇〇〇万人と実数が分からないくらいである。辰雄はよく「神さま、降参です」と言っていたが、あの時日本の国が完膚無きまでに叩きつぶされたように、無教会のキリスト者辰雄も「私は本当にキリスト者であったのか？」と打ちのめされたことは間違いない。

考え続けたのはまぎれもなく「一億総玉砕」であり、キリストの十字架であった。キリストを十字架にかけたローマ兵は辰雄であった。二六〇万～三〇〇万人の同胞を死なせたのも辰雄であった。十字架にかけられるべきは辰雄であったにもかかわらず、キリストは自らを十字架にかけ、辰雄の罪を担った。その事態そのものに辰雄は打ちのめされたのであった。

イエスの福音は、家族の無事を感謝する「敬虔なクリスチャン」にくだるのか？ それまでの辰雄なら良かったかもしれないが、焦土と化した国を見た辰雄は、神の前に身を投げ出してひれ伏し、「砕けた魂」にならなければダメだと狐禅寺村の水車小屋で熱く語ったことだろう。

しかし母は、「戦争が終わって本当に良かった。家族全員が無事であったこと、神さま、感謝します」だったと思う。それは、ごく普通の日本女性の実感であり、それはそれで悪いわけではないが、このあたりから辰雄とその妻・順子との間に少しずつ違いが広がっていったのではないかと思う。

東京に戻った姉二人は、戦前と同じようにミッションスクールの立教女学院にかよい、私はその日曜学校に行くようになった。イースターにはゆで卵をもらい、クリスマスにはパイプオルガンの響く礼拝堂でレースをかぶった姉たちのキャンドルサービスをながめ、「天にましますわれらの父よ」という主の祈りを唱えるクリスチャン家庭を何の疑いもなく営んでいた。

一方の辰雄は、黙示録のように「視よ、神の幕屋、人とともにあり」とまっしぐらに原始福音の道へ突き進み、昭和二三年三月、「砕けの終末論序説」を発表、同十一月、小諸にて「砕けの神学」を語り、翌昭和二四年、「無教会神学論」、そして昭和二五年三月二六日「内村鑑三没後二〇周年記念講演会で司会役を務めた。この席上、司会でありながら「無教会」の諸先輩を前に現在の無教会の在り方はダメだとぶち上げ、矢内原忠雄以下の不興をかかったという。